OM——承認の辞としての——

木　村　俊　彦

Ein Wort feierlicher Bekräftigung
und ehrfurchtsvoller Anerkennung
——*R. Roth*——

『Gaṇa-pāṭha』85, 42 および 254, 118 に挙げられる「OM」なる辞は，『Aṣṭādhyāyī』I, 4, 57 (cādayo'sattve) および I, 1, 37 (svarādinipātam avyayam) に対して付せられたもので，この語については VIII, 2, 89 で，"om abhyādāne"＝「OM は初めに（三音量で述べる）」と言うのみだ。「初めに」とは，バットージ・ディークシタが，

> oṃśabdasya plutaḥ syād ārambhe/ o 3 m agnim īḷe purohitam/ abhyādāne kim/ om ityekākṣaram/[1)]

と述べる様に，聖典諷誦の初頭に発せられることで，聖なる瞑想に資する聖音としては，改めて論ずべきものはない。我々はこの特異な辞の由来を意味論の上から追求して，svāhā, svadhā, vaṣaṭ, hiṅ, bhūr bhuvaḥ svaḥ などと同様の婆羅門教における祭祀上の間投詞に成るまでの言語的機能を把握しておきたいと考える。

『チャーンドーグヤ・ウパニシャッド』は，『サーマ・ヴェーダ』に関わるチャンドーガ祭官の名に由来する書名の通り，詠歌（サーマン）の端緒に発せられる聖音「オーム」の考察から始まり，I, 1, 8 で言う。

> tad vā etad anujñākṣaraṃ/ yaddhi kiṃcid anujānāty om ityeva tad āhaiṣo eva saṃrddhir yad anujñā/ (Ānandāśrama Skt. Ser.)

「またそれは承認の音節なり。げに何かを承認するに，『オーム』と言うなれば。承認とは満足の謂なり」と。承認の辞としての om は中世の辞典でも認められ，

---

1) Siddhānta-kaumudī ed. b. Vāsudev Laxman Śāstrī Paṇśīkar (Bombay 1929) p. 345 上記は Böhtlingk, Pāṇini's Grammatik (Leipzig 1887) に依る。音声学派の中には二音量半の説もあつて，Taittirīya-Prātiśākhya XVIII, "o-karaṃ tu praṇava eke 'rdhatṛtīyamātram bruvate/ (Whitney-ed.)＝「しかしながら（通常の二重母音 "O" と違つて）聖音について或る派は二音量半を発音する。」しかし特に延長した (pluta) 場合は三音量が標準である。Cf. "tisraḥ pluta ucyate svaraḥ" (Ṛgveda-Prātiśākhya I, Benares Skt. Ser.)

アマラシンハは，

……om evam paramam mate/ (Nāmaliṅgānuśāsana III, 4, 13)

と言い，註釈者クシーラスヴァーミンに依れば，満足なる場合に「然り」と言うとするものである[2]。アマラシンハは承認の辞を evam によつて説明しているが，この語は āma と共に，パーリ文献に見られる[3]。ジャイナ・プラークリット等と共に，いわゆる仏教混淆梵文でも "sa kathayatyāmeti" といつた例が挙げられる[4]。

これに相当する古典サンスクリット語「ām」は，モニアー・ウィリアムズに依れば，『シャクンタラー』，『武勇で得しウルヴァシー』，『土の小車』等に使われ，「om」の日常語化したものの編入であることを疑わせるが，古典サンスクリットに秀でる Apte's Prac. Skt. Eng. Dic. では，「om」も古典文学にかなり使われている[5]。因みにヘーマチャンドラは，

……om ām paramam mate/ (Abhidhānacintāmaṇikośa k. 1540)

と言つている。一層簡略な「ā」は，『Vācaspatyam』などの近世レキシコンで承認の辞とされる。(ā=aṅgīkāre)

om praṇave'ṅgīkṛtāvapi (Anekārthasaṅgraha VII, 6)

とヘーマチャンドラにされるこの語は，ロートの推測とは逆に，om→ām→ā の転訛である可能性もあるが，いずれも「実に」という副詞の機能を持つていることも共通しており，『Śatapatha-Brāhmaṇa』I, 4, 1, 30 が，"aśvo na devavāhana iti/ aśvo ha vā eṣa bhūtvā devebhyo yajñaṃ vahati/ yad vai netyṛcyom iti tat/ tasmād āhāśvo na devavāhana iti/" (Weber-Ausg.) =「"馬が神々に運べる如く，" と。げにそは，馬と成りて神々に供儀をもたらす。讃歌における "na" は "om" の意味なり。故に曰く "馬が神々に運べる如く" と，」と言うは，この機能を踏まえたものだ。

---

2) The Nāmaliṅgānuśāsana of Amarasiṃha with the commentary of Kṣīrasvāmin, ed. b. Krishnaji Govind Oka (Poona 1913) p. 229.

3) e. g. "evam bhante'ti (畏まりぬ，大徳よ，と) (Pāli-Vinaya, Suttavibhaṅga I, Pārājikā III) "te ca me evam puṭṭhā āmo ti paṭijānanti (私にかく問われて，彼等は「然り」と答えぬ。) (Dīgha-Nikāya IX, 33).

4) F. Edgerton, Buddhist Hybrid Sanskrit Vol. II p. 99.

5) "om ityucyatām amātyaḥ" (Mālavikāgnimitra VI) "om ityuktavato'tha śārṅgiṇa iti" (Śiśupālavadha I) "dvitīyaśced om iti brūmaḥ" (Sāhityadarpaṇa I) Cf. "om bho 3 iti cābhyanujñā" (Ṛgveda-Prātiśākhya VI, 16).

承認の辞としての "om" はかくして "tathā" と相並ぶことになり，このことを『Aitareya-Brāhmaṇa』VII, 18 は，

om ityṛcaḥ pratigara evaṃ tatheti gāthāyā om iti vai daivaṃ tatheti mānuṣam/ (Ānandāśrama Skt. Ser.)

「『オーム』とは讃歌に対する応答の意味であり，同様『タタハー』とは偈に対する応答の意味である。『オーム』はげに神に属し，『タタハー』は人間に属する。」[6]

と，興味深い提唱をする。これによると，"om" は専ら神事に際して用いられるが，しかし，一般的世俗的用語としての "tathā" と同じい意味を持つ，ということになる。承認を示す"tatheti" は『Śatapatha-Brāhmaṇa』で既に次の様に頻出する。

I, 1, 4, 15–16 I, 3, 3, 13–16 I, 5, 2, 16 I, 6, 4, 4 II, 4, 3, 4 V, 1, 1, 3 V, 2, 4, 12 V, 5, 5, 1 VI, 1, 2, 13 VI, 1, 2, 21 VI, 2, 3, 4–8 VIII, 1, 1, 3 VIII, 2, 1, 3 VIII, 3, 1, 3 VIII,3, 1, 11 VIII, 4, 1, 3–4 VIII, 4, 3, 2 VIII, 5, 3, 1 XI, 1, 6, 19 XI, 5, 1, 5 XI, 5, 3, 13[7].

これに対して om iti の例は，

sa hovāca kati devā yājñavalkyeti trayaśca trī ca śatā trayaśca trī ca sahasre-tyom iti hovāca/ (Śatapatha-Brahmaṇa X, 6, 3, 4)

「彼は問えり。幾何の神かある，ヤージュニャヴァルクヤよと。三百三と三千三なり，と。よろしい，と言えり。」以下同文が続き，三十三なり，三なり，一半なり，一なりと答え，それぞれに "om" と答える。いまひとつの例は，『Śatapatha-Brāhmaṇa』X, 6, 1, 4–9 で，アシュヴァパティ・カイケーヤ王が各々の婆羅門に，何を普遍者として認識するか，と聴問し，「『大地を，王よ』と答えると，『よろしい』と言う。」

pṛthivīm eva rājanniti hovācom iti[8]

---

6) Cf. Sāyaṇa-Bhāṣya ad hoc "om ityetacchandorūpaṃ daivaṃ devair aṅgīkārārthe prayujyate tatheti mānuṣam manuṣyā aṅgīkāre tatheti śabdam prayuñjate/".

7) 精査すれば，他の箇処にも見出されよう。また Aitareya-Br. III, 20 VII, 15 Chāndogya-Up. I, 1, 3 etc. を見よ。この最も古い例は Atharvaveda III, 4, 56 "tad ayaṃ rājā varuṇas tathāha sa tvāyam ahvat/" (Lindenau-ed.)=「そを『よし』とヴァルナ王は言えり。彼は汝を呼べり.」に見られる如くである。但しホイットニーやブルームフィールドは，tatheti の用法でない為か，通常の副詞に把握している。(HOS. Vol. 7 p. 90 SBE. Vol. 42 p. 113)。

以下類似の問答文が続き，いずれの見解にも“om”（よろしい）と一応の承認をする[9]。真の解答はプルシャなりということで，この見性によつて再死にうち克ち（punarmṛtyuṃ jayati），天寿を全うする（sarvam āyur eti）と言う。

このブラーフマナの後尾に在る『Bṛhadāraṇyaka-Upaniṣad』V, 2, 1–3 でも，主神プラジャーパティ神に児孫たる天神・人間・悪魔（アスラ）が聴問し，彼等の見解（けんげ）に「『よろしい』と答える（om iti hovāca）。」

om なる間投詞はマクドネル博士に依れば，既に『Maitrāyaṇī-Sanhitā』に出るが[10]，『Vājasaneyi-Sanhitā』II, 13b で，

viśvedevāsa iha mādayantām/ o 3 m pra tiṣṭha/

とある。ウヴァタやマヒーダラの解釈に依れば，「これに際して一切神は喜べ。『よし』と出よ」と言うもので，“o 3 m” は，abhyupagama, anujñā, aṅgīkāra の意味を持つ，と。そして，“o 3 m pra tiṣṭha” を “tathāstu pratiṣṭha prayāṇaṃ kuru” と古典サンスクリット語で解釈する[11]。

元来古代インド・ヨーロッパ語族には古代英語・gēa（E. yea）やドイツ語・ja などに相当する承認の辞がなかつたとされ[12]，その場合に指摘される，反復による承認の返答は，ヴェーダ語を含むサンスクリット語にもよく見られ，多くは “hi” なるニパータを伴なう。

tam eva tvam paśyasīti taṃ hi/（ŚBr.＝A. A. Macdonell, A Vedic Grammar for Students p. 253）

kumārānu tvāśiṣat pitetyanu hi bhagava iti/（Chānd. Up. V, 3, 1）

「若者よ，父は汝に教えたか。教えました，先生。」

sa hovācāstīha prāyaścittī 3 r ityastīti/（ŚBr. XI, 6, 1, 3–6）.

「彼（ブリグ）は問うた。これに対する贖罪法はあるのか，と。ある，と（答

8）om が前行の母音等を滅却することについては，パーニニのスートラ VIII, 2, 89（praṇavaṣ ṭeḥ）で認められている特異用法。パーシュパタ・シャイヴァの五聖句の第五句末尾にも “sadāśivom” とあつた。小稿「ルドラ・ガーヤトリーの生成と展開——婆羅門教からシヴァ教へ——」（文化第三十九巻 1・2 号）48–49 頁では，このパーニニの規定に気付かなかつた。

9）Sāyaṇa-Bhāṣya ad hoc “om iti aṅgīkāraḥ.”

10）木村訳『マクドネル・サンスクリット文学史——古代インド宗教文献概説——』（山喜房）第七章第六節。筆者の所有する Die Neuauflage（Wiesbaden 1970）は zweiter Teil までなので，確認できなかつた。

11）Mahīdhara-Bhāṣya ad Vāj.（Jagadishlal Śāstri-ed.）28, 12

12）高津春繁『ギリシャ語文法』386 頁。

えた)。」

因みに『Uṇādi-sūtra』は "om" の起源を √av（守る）に求めているが[13]，これは ū-（動形容詞形），ūma-（守り手，友），oma-（同），oman-（助力）等の派生形と混同したものだ[14]。尚，聖典諷誦の際の聖音としての示唆は，既に『Aitareya-Brāhmaṇa』V, 32 におけるプラジャーパティ神の世界創造に関してあり，この主神が苦行によつて地・空・天を，それから火・風・太陽を，更に讃歌・祭詞・詠歌を，三つのヴヤーフリティを，そして最後に，a, u, m（=om）を創つたと言う。

かくしてサンヒター期の後期からブラーフマナ期初期にかけて，"om" なる辞は登場し，やがて急速に神聖性を帯びて祭祀と関わる様になつたことが理解される。筆者は一時，旧約『申命記』27, 15- などに出る āmēn の如きセム語が，セム文字のインド到来[15]と om 出現の時期的一致から，この辞の起源ではないかと考えたこともあつたが，本稿では一応婆羅門教文献に反映するこの辞の言語的機能[16]を覚え書きにまとめて，宗教と言語の関りの理解に資したいと考えた。

---

13) Cf. Viśva Bandhu, A Vedic Word Concortance, "OM"

14) Cf. "omāsaśca carṣaṇīdhṛto viśvedevāsa āgata dāśvāṃso dāśuṣaḥ sutam"（Ṛgveda I, 3. 7)=「人を支える守り手たる一切神よ，篤き者よ，信徒のソーマに来たれよかし。」

15) 『マクドネル・サンスクリット文学史』第一章第七節参照。

16) 東北大学（理）研究員・Bajaj 氏（Delhi Univ.）に依れば，om=ām=ā は現在のヒンディー語では承認の辞としては全く使わない。"jī haṃ" などがそれに代ると。

* gāthā を世俗的答辞とする『アイタレーヤ・ブラーフマナ』の記述について，P. Horsch, Die vedische Gāthā- und Śloka-Literatur も述べてはいるものの，むしろ世俗的讃歌（nārāśaṃsī）と対照的に古聖歌たることを強調している。様式は古くとも，『アイタレーヤ・ブラーフマナ』の言わんとする所は，世俗的答辞 "tathā" が世俗的物語（ākhyāna）の中に収められる偈（gāthā）と対応することである。従つて聖なる神学書・ブラーフマナ文献の中では，偈は聖なる讃歌（ṛc）に対して世俗的第二義的なものと見なされている。従つてサーンクヤ・ヨーガ系統またはジャイナ・仏教などの沙門系統の宗教では偈が逆に権威あるジャンルになる。（尚，荒牧典俊氏の日仏年報 41 号所収論文を参照。）